

受益者のみなさまへ

平素は格別のご愛顧を賜り厚く御礼申し上げます。

アバディーン・ジャパン・オープン(愛称：メガトレンド)は、2024年9月17日に第54期の決算を行いました。

当ファンドは、日本株式を主要投資対象とし、グローバルな視点に立って日本の株式市場の大きな流れを捉え、企業訪問等を中心とした徹底した調査・分析に基づき個別銘柄を選別するボトムアップ・アプローチによるアクティブ運用を行います。長期的な視野に立った運用を基本とし、運用コストを低減したポートフォリオの構築を行いつつ長期的にベンチマークを上回る投資成果を目指し、信託財産の成長をはかることを目的とします。

なお、株式への投資には、制限を設けません。

当期も方針に沿った運用を行いました。ここに運用経過等をご報告申し上げます。

今後とも引続きお引立て賜りますようお願い申し上げます。



メガトレンド アバディーン・ジャパン・オープン

追加型投信／国内／株式

交付運用報告書

第54期

決算日：2024年9月17日

第54期末 (2024年9月17日)	
基準価額	14,716円
純資産総額	5,613百万円
作成対象期間 (2024年3月19日～2024年9月17日)	
騰落率 (分配金(税引前)再投資後)	△5.3%
分配金(税引前)	0円

(注) 騰落率は収益分配金(税引前)を分配時に再投資したものとみなして計算したものです。

アバディーン・ジャパン株式会社

〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-2
大手町フィナンシャルシティ グランキューブ 9階
お問い合わせ窓口 03-4578-2251

(受付時間は営業日の午前9時から午後5時までです。)

インターネット・ホームページ

<https://www.abrdn.com/ja-jp/investor>

当ファンドは、投資信託約款において運用報告書(全体版)に記載すべき事項を、電磁的方法によりご提供する旨を定めております。

本書記載事項以外の詳細な内容を記載した運用報告書(全体版)は当社ホームページ(右記アドレス)でご覧いただけます。

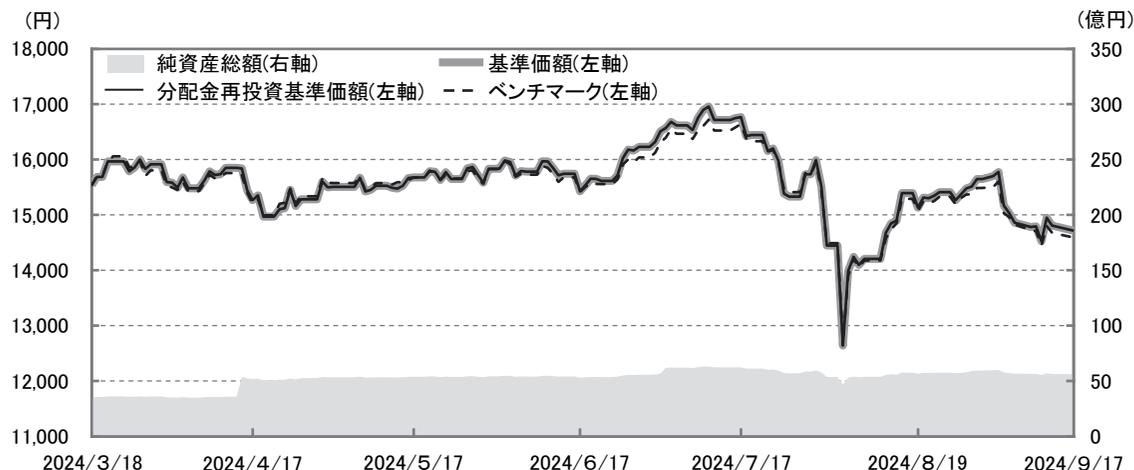
書面での交付をご希望の場合には、販売会社を通じて交付いたします。

右記ホームページの「ファンド一覧」から、当ファンドの運用報告書(全体版)を閲覧およびダウンロードすることができます。

● 運用経過

当期中の基準価額等の推移について

ファンド	当ファンドは第54期の決算を迎え、基準価額は前期末の15,539円から当期末には14,716円、値下がり額は823円、当期の騰落率は5.3%の下落となりました。
ベンチマーク	ベンチマークであるTOPIX(東証株価指数)の騰落率は6.1%の下落となり、当ファンドの騰落率はこれを0.8%上回りました。



- (注1) ベンチマーク(ファンドの運用を行うにあたって運用成果の評価基準又は目標基準とする指標)は、『TOPIX(東証株価指数)』です。ベンチマークは、期首の値をファンドの基準価額と同一になるように指数化しています。
- (注2) 分配金再投資基準価額は、収益分配金(税引前)を分配時に再投資したものとみなして計算したもので、ファンド運用の実質的なパフォーマンスを示すものです。
- (注3) 分配金を再投資するかどうかについてはファンドおよび販売会社の取り決め、もしくはお客様がご利用のコースにより異なります。また、ファンドの購入価額により課税条件も異なります。したがって、上記の推移がお客様の損益の状況を示すものではありません。

第54期首	15,539円
第54期末	14,716円(既払分配金(税引前)0円)
騰落率	△5.3%(分配金(税引前)再投資ベース)

基準価額の主な変動要因

上昇要因	配当引き上げや自社株買いなど株主還元策の強化が好感された企業や海外事業の成長に円安基調が追い風となり業績拡大が期待される企業などが上昇しました。また、政策保有株の売却が進み市場全体の取引量が押し上げられたことも株価上昇の支えとなり基準価額の上昇につながりました。
下落要因	前期まで上昇していた銘柄に利益確定の売りが見られたほか、円高の進行が輸出企業の収益にマイナスの影響となり下落要因となったことや、今後の業績回復が見込まれるものの短期的に市場の期待に応えられなかった企業などの株価が低調となり、基準価額の下落要因となりました。

1万口当たりの費用明細

項 目	第54期 (2024年3月19日～2024年9月17日)		項目の概要
	金額	比率	
平均基準価額	15,869円	—	期中の平均基準価額です。
(a) 信託報酬 (委託会社) (販売会社) (受託会社)	132円 (60) (63) (9)	0.832% (0.378) (0.397) (0.057)	信託報酬＝期中の平均基準価額×信託報酬率 委託した資金の運用の対価 情報提供、各種書類の送付、口座内でのファンドの管理および事務手続き等の対価 運用財産の管理、委託会社からの指図の実行の対価
(b) 売買委託手数料 (株 式)	3 (3)	0.019 (0.019)	売買委託手数料＝期中の売買委託手数料÷期中の平均受益権口数 売買委託手数料は、有価証券等の売買の際、売買仲介人に支払う手数料
(c) その他費用 (監査費用)	1 (1)	0.006 (0.006)	その他費用＝期中のその他費用÷期中の平均受益権口数 監査費用は、監査法人に支払うファンド監査に係る費用
合 計	136	0.857	

(注1) 費用(消費税等のかかるものは消費税等を含む)は、追加・解約により受益権口数に変動があるため、簡便法により算出した結果です。

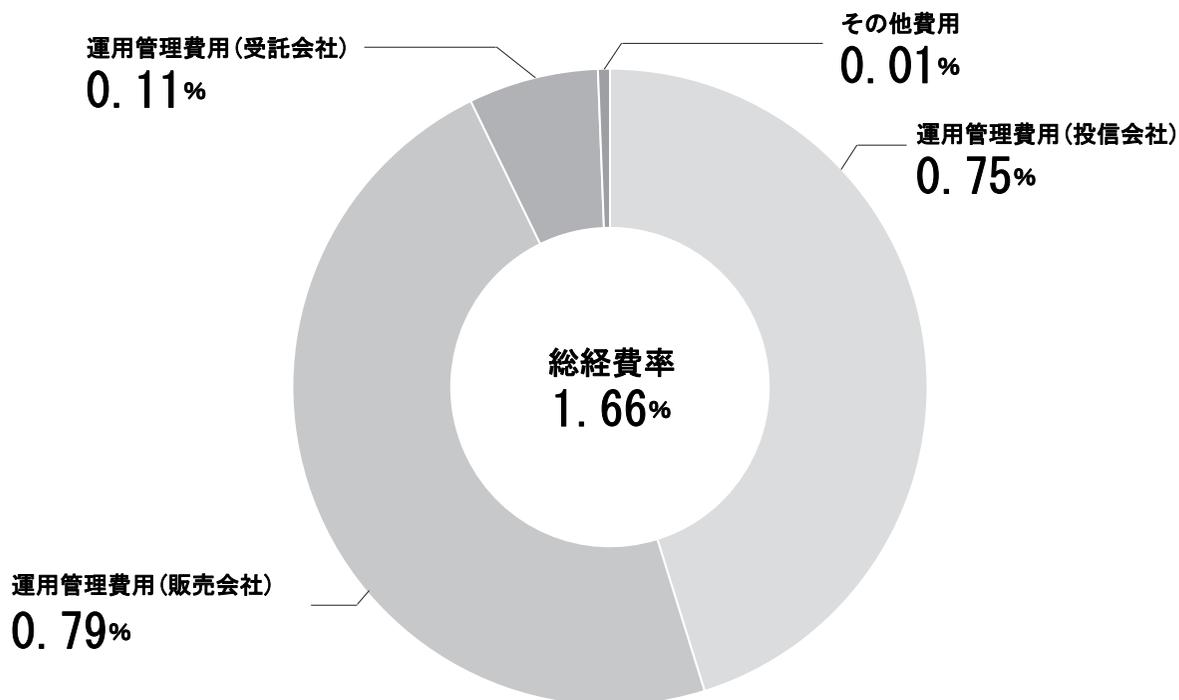
(注2) 「比率」欄は1万口当たりのそれぞれの費用金額を期中の平均基準価額で除して100を乗じたものです。

(注3) 項目毎に円未満は四捨五入し、単位未満は0円と表示しています。

(参考情報)

総経費率

当期中の運用・管理にかかった費用の総額(原則として、募集手数料、売買委託手数料及び有価証券取引税を除く。)を期中の平均受益権口数に期中の平均基準価額(1口当たり)を乗じた数で除した**総経費率(年率)は1.66%です。**



(注1) 費用は、1万口当たりの費用明細において用いた簡便法により算出したものです。

(注2) 各費用は、原則として、募集手数料、売買委託手数料及び有価証券取引税を含みません。

(注3) 各比率は、年率換算した値です。

(注4) 上記の前提条件で算出したものです。このため、これらの値はあくまでも参考であり、実際に発生した費用の比率と異なります。

最近5年間の基準価額等の推移について



- (注1) ベンチマーク(ファンドの運用を行うにあたって運用成果の評価基準又は目標基準とする指標)は、『TOPIX(東証株価指数)』です。ベンチマークは、2019年9月17日の値をファンドの基準価額と同一になるように指数化しています。
- (注2) 分配金再投資基準価額は、収益分配金(税引前)を分配時に再投資したものとみなして計算したもので、ファンド運用の実質的なパフォーマンスを示すものです。
- (注3) 分配金を再投資するかどうかについてはファンドおよび販売会社の取り決め、もしくはお客様がご利用のコースにより異なります。また、ファンドの購入価額により課税条件も異なります。したがって、上記の推移がお客様の損益の状況を示すものではありません。

最近5年間の年間騰落率

決算日	2019年9月17日	2020年9月17日	2021年9月17日	2022年9月20日	2023年9月19日	2024年9月17日
分配落ち基準価額(円)	9,272	10,679	13,888	11,536	13,544	14,716
期間分配金合計(税引前)(円)	—	0	0	0	0	0
分配金再投資基準価額騰落率	—	15.2%	30.0%	△ 16.9%	17.4%	8.7%
ベンチマーク騰落率	—	1.5%	28.2%	△ 7.3%	24.8%	5.2%
純資産総額(百万円)	3,324	3,062	2,884	2,269	3,027	5,613

投資環境について

当期の日本株式市場は、活発な動きとなりました。IPO市場が活性化しており大型案件が注目を集めていることや、日本企業の業績改善や株主還元強化などを通じた資本効率の改善などを材料に、上昇基調が続きました。さらに、円安の進行や訪日外国人観光客の増加なども株価を押し上げ、日本株式市場は34年振りの最高値を更新しました。しかし7月末に日銀が利上げを決定した流れを引き継ぎ8月に入ると、米景気の先行き懸念や円高加速への警戒感が強まり歴史的な急落を記録、その翌日には過去最大の上昇となるなど荒い値動きとなりました。その後株価は回復傾向を辿ったものの、日銀の金融政策正常化は険しい道のりが予想され、また米国の景気後退懸念や9月利下げ観測の高まり、雇用情勢などを背景に株価は一進一退と方向感に乏しい展開のなか、小幅な下落で期末を迎えています。

ポートフォリオについて

当ファンドでは、不確実性の高い投資環境の中、ボトムアップ・アプローチによる銘柄選択においては、事業環境の変化に柔軟に対応することで事業成長しつつ企業のファンダメンタルズの更なる向上が期待できる銘柄にフォーカスし、ポートフォリオの構築及びポートフォリオとしての「クオリティ」の向上に努めました。幅広い業種・セクターから銘柄選択を行い、各々の領域における、市場の規模・成長性や、競合対比の商品・サービス・技術の優位性の高さ、並びに先進的な経営姿勢などに着目した投資判断をしています。

当期に新たに組み入れた銘柄の一つに、収益力の強化や持ち合い株の削減による資本効率の向上が期待される総合物流銘柄があります。総合物流銘柄は専門性を要する精密機器や危険品の輸送に関して長年の実績を有しており、近年は農産物や消費財関連の領域においても事業を拡大しています。

ベンチマークとの差異について

ベンチマークであるTOPIX(東証株価指数)の騰落率は6.1%の下落となり、当ファンドの騰落率はこれを0.8%上回りました。当期においてファンドのパフォーマンスにプラスに寄与した銘柄は、以下の通りです。

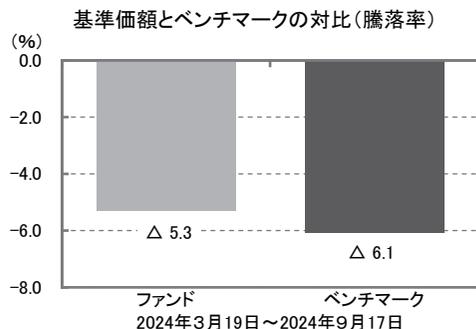
■中外製薬:主要製品の売り上げが好調だったことや開発パイプラインへの期待が高まったことなどが主因となり株価は上昇しました。

■日立製作所:業績の改善が見込まれることや同社のデジタルトランスフォーメーション(DX)戦略への評価が高まったことに加え、増配・自社株買いなど一段の株主還元強化が好感され上昇しました。

一方でマイナスに寄与した銘柄は、以下の通りです。

■富士電機:5月に発表された中期計画が市場の期待に応えられなかったことや、パワー半導体事業の見直しに対する懸念から下落しました。

■東京エレクトロン:米国による半導体製造装置の中国への輸出規制強化の懸念が広がったことや米国の利回り上昇、さらに主要顧客のTSMCが収益成長予測を下方修正し今年度の予想を下回るガイダンスを発表したことで、半導体市場の不透明感が広がったことにより下落しました。



分配金について

期末の基準価額の水準を勘案し、当期の収益分配を見送らせて頂きました。なお、収益分配に充てなかった利益は信託財産に留保し、留保益の運用については、特に制限を設けず、元本部分と同一の運用を行います。

分配原資の内訳

(単位:円・%、1万口当たり・税引前)

項目	第54期 (2024年3月19日～2024年9月17日)
当期分配金	—
(対基準価額比率)	—%
当期の収益	—
当期の収益以外	—
翌期繰越分配対象額	9,077

(注1) 「当期の収益」は「経費控除後の配当等収益」および「経費控除後・繰越欠損補填後の売買益(含、評価益)」から分配に充当した金額です。また、「当期の収益以外」は「収益調整金」および「分配準備積立金」から分配に充当した金額です。

(注2) 円未満は切捨てており、「当期の収益」と「当期の収益以外」の合計が「当期分配金」(税引前)に合致しない場合があります。

(注3) 当期分配金の「対基準価額比率」は当期分配金(税引前)の期末基準価額(分配金込み)に対する比率であり、ファンドの収益率とは異なります。

● 今後の運用方針について

企業の成長性に着目して大型株を中心に幅広く投資機会を探り、企業訪問などを中心に徹底した調査・分析に基づき個別銘柄を選別するボトムアップ・アプローチによるアクティブ運用を行ってまいります。

● お知らせ

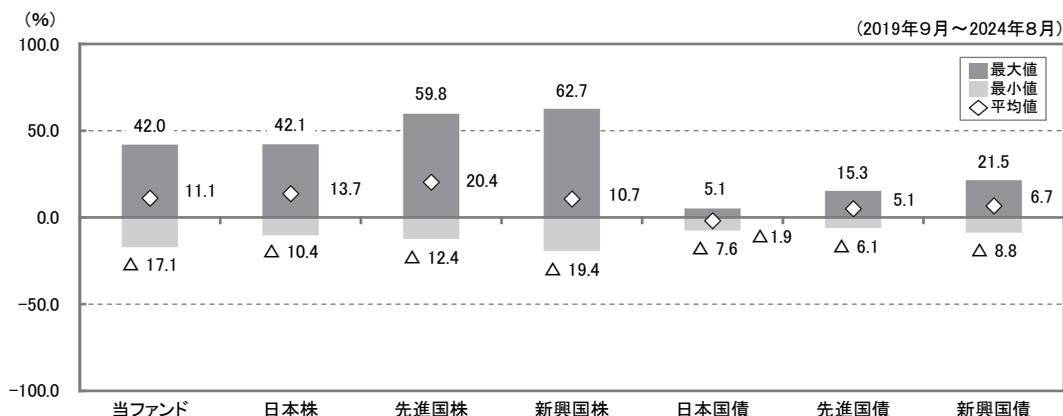
該当事項はありません。

● 当ファンドの概要

商 品 分 類	追加型投信／国内／株式
信 託 期 間	無期限
運 用 方 針	グローバルな視点に立って日本の株式市場の大きな流れを捉え、企業訪問等を中心とした徹底した調査・分析に基づき個別銘柄を選別するボトムアップ・アプローチによるアクティブ運用を行います。長期的な視野に立った運用を基本とし、運用コストを低減したポートフォリオの構築を行いつつ長期的にベンチマークを上回る投資成果を目指し、信託財産の成長をはかることを目的とします。
主 要 投 資 対 象	日本株式を主要投資対象とします。
当ファンドの 運 用 方 法	株式への投資には、制限を設けません。
分 配 方 針	毎決算時(原則として毎年3月17日および9月17日)に、繰越分を含めた利子、配当収入および売買益(評価益を含みます)の中から、基準価額の水準、市況動向などを勘案して決定します。収益分配金は税金を差引いた後、自動けいぞく投資契約に基づいて自動的に無手数料で全額再投資されます。

● 参考情報

当ファンドと代表的な資産クラスとの騰落率の比較



* 2019年9月～2024年8月の5年間の各月末における直近1年間の騰落率の最大・最小・平均を、当ファンド及び代表的な資産クラスについて表示し、当ファンドと代表的な資産クラスを定量的に比較できるように作成したものです。全ての資産クラスが当ファンドの投資対象とは限りません。当ファンドの騰落率は、税引前の分配金を再投資したとみなす分配金再投資基準価額により計算され、実際の基準価額に基づく騰落率とは異なる場合があります。騰落率は直近月末から60ヵ月遡った算出結果であり、決算日に対応した数値とは異なります。

* 各資産クラスの指数

日本株・・・東証株価指数 (TOPIX) (配当込み)

先進国株・・・MSCIコクサイ・インデックス (配当込み、円換算ベース)

新興国株・・・MSCIエマージング・マーケット・インデックス (配当込み、円換算ベース)

日本国債・・・FTSE日本国債インデックス

先進国債・・・FTSE世界国債インデックス (除く日本・円ベース)

新興国債・・・JPモルガンGBI-EMグローバル・ディバーシファイド (円ベース)

注：海外の指数は、為替ヘッジなしによる投資を想定して、円換算しております。

「代表的な資産クラスとの騰落率の比較」に用いた指数について

- 「東証株価指数 (TOPIX)」に関する知的財産権その他一切の権利は株式会社JPX総研に帰属します。株式会社JPX総研はTOPIXの算出もしくは公表方法の変更、「TOPIX」の算出もしくは公表の停止または「TOPIX」の商標の変更もしくは使用の停止を行う権利を有しています。
- 「MSCIコクサイ・インデックス」および「MSCIエマージング・マーケット・インデックス」は、MSCI Inc.が開発した指数です。同指数に対する著作権、知的所有権、その他一切の権利はMSCI Inc.に帰属します。またMSCI Inc.は同指数の内容を変更する権利および公表を停止する権利を有しています。
- 「FTSE日本国債インデックス」および「FTSE世界国債インデックス (除く日本・円ベース)」は、FTSE Fixed Income LLCにより運営され、世界主要国の国債の総合収益率を各市場の時価総額で加重平均した債券インデックスです。同指数はFTSE Fixed Income LLCの知的財産であり、指数に関するすべての権利はFTSE Fixed Income LLCが有しています。
- 「JPモルガンGBI-EMグローバル・ディバーシファイド (円ベース)」とは、J.P.Morgan Securities Inc.が算出し公表している指数です。当指数の著作権は、J.P.Morgan Securities Inc.に帰属します。

● ファンドのデータ

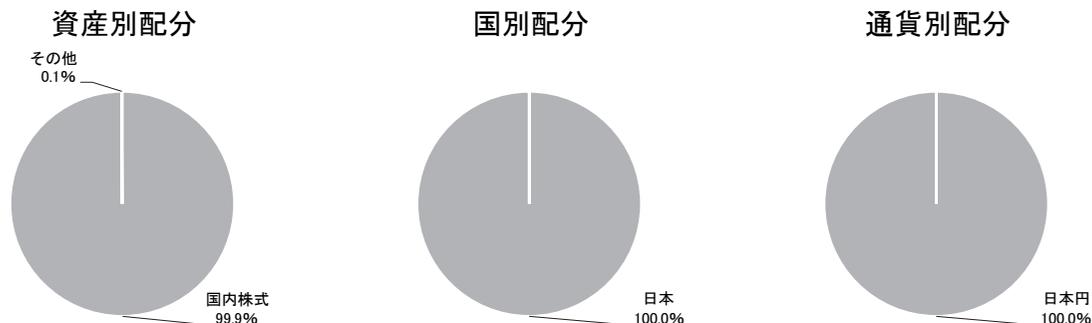
当ファンドの組入資産の内容

組入上位10銘柄

(組入銘柄数：67銘柄)

	銘柄名	業種名	組入比率
1	日立製作所	電気機器	4.7%
2	三菱UFJフィナンシャル・グループ	銀行業	4.6%
3	東京海上ホールディングス	保険業	3.9%
4	ソニーグループ	電気機器	3.6%
5	リクルートホールディングス	サービス業	3.3%
6	信越化学工業	化学	2.9%
7	パン・パシフィック・インターナショナルホールディングス	小売業	2.9%
8	日本電気	電気機器	2.8%
9	トヨタ自動車	輸送用機器	2.7%
10	富士電機	電気機器	2.7%

種別配分等



(注1) 組入上位10銘柄、資産別・国別・通貨別配分の各データは当ファンドの直近の決算日である2024年9月17日現在のものです。

(注2) 組入上位10銘柄、資産別・国別・通貨別配分の各比率は純資産総額に対する評価額の割合です。

※組入全銘柄に関する詳細な情報等については、運用報告書(全体版)をご覧ください。

純資産等

項目	第54期末 (2024年9月17日)
純資産総額	5,613,340,284円
受益権総口数	3,814,425,988口
1万口当たり基準価額	14,716円

(注) 当期における追加設定元本額は1,651,231,573円、同解約元本額は111,051,178円です。